

平成21年7月2日・3日

於：京都市「京都ガーデンパレス」

講演 I

「図書館では静かにしましょう本たちはときどき小さな声で呼ぶから」

| | | |
|-------------|--------|---------|
| 日本私立短期大学協会 | 副会長 | |
| 図書館情報委員会 | 委員長 | |
| 千葉経済大学短期大学部 | 理事長・学長 | 佐久間勝彦 氏 |

主催：財団法人私学研修福社会
協力：日本私立短期大学協会

図書館では静かにしましょう本たちはときどき小さな声で呼ぶから

日本私立短期大学協会 副会長
図書館情報委員会 委員長
千葉経済大学短期大学部 理事長・学長 佐久間勝彦 氏

図書館では静かにしましょう本たちはときどき小さな声で呼ぶから
江森夏来 (2008.10.19・NHK教育テレビ『NHK短歌』入選歌)

(1) 工場 (こうじょう) と工場 (こうば) は、どう違うでしょう

① 国語辞典では

◆ 工場 (こうじょう)

- ・ 多くの労働者を使って機械などで物を生産する所。(新明解国語辞典)
- ・ 一定の機械などを設備し、物の製造・加工・修理などを行う所。(明鏡国語辞典)

◆ 工場 (こうば)

- ・ こうじょう (工場) の、一時代前の表現。やや小規模のものを指すことが多い。(新明解国語辞典)
- ・ 「こうじょう」よりも規模の小さなものをいうことが多い。(明鏡国語辞典)
[町こうば・下請けこうば・こうば渡し値段]

② 小関智弘さんにとって 『手仕事を見つけたぼくら』 (小学館文庫)

◆ 工場 (こうじょう)

まず建物があって、そのなかで機械が動いていて、そこで人間が何なら仕事をしている光景が見えます。働いている人たちは点景にすぎません。

◆ 工場 (こうば)

まず作業服の人間が大写しに見えて、その人が使っている機械があり、機械を囲う建物が見えます。だからわたしは「工場 (こうば)」にこだわります。

◇ 「こうじょう」と「こうば」は、何から思い浮かべてその映像を描くか。私たちの視座の違いによって読み方は異なる。

◇ 「拵える (こしらえる・こさえる)」には、単に「つくる」とか「製造する」というよりも、「あれこれよく考えて、思うようなものに仕上げる」といった意味が込められたことばなので、単に「つくる」とか「造る」よりも内容が深くて、わたしの好きなことばです。
(『職人ことばの「技と粋」』東京書籍)

③ 大学はどのように、私たちに見えてくるでしょう

◆ こうじょう型

◆ こうば型

④ 図書館はどのように、私たちに見えてくるでしょう

◆ こうじょう型

◆ こうば型

◇キャンパスの中で、あなたのお気に入りの場所はどこですか（2つまで挙げてください）
[学生生活に関する調査報告書（日本私立短期大学協会学生生活委員会・平成20年12月）
334短期大学 32,537名（回答率 92.5%）・平成19年11月16日～12月31日調査]

図書館（31.4%）／学生食堂（29.3%）／教室（24.7%）／コンピュータ室（16.6%）／
《誰にも邪魔されない自分だけの空間であり、自分が興味ある分野の資料や最新情報に触
れられることから一人で過ごすお気に入りの場所となっていると思われる。》

(2) 読書（どくしょ）でしょうか、読書（よみかき）でしょうか

① 国語辞典では

◆ 読書（よみかき）

- ・ 文字や文章を読むことと書くこと。（明鏡国語辞典）
- ・ 書かれた言葉を読むことと、言葉を文字で書き表すこと。（新明解国語辞典）

◆ 読書（どくしょ）

- ・ 書物を読むこと。（明鏡国語辞典）
- ・ （研究調査や受験勉強の時などと違って）想（ソウ）を思いきり浮世の外に馳せ、精神を未知の世界に遊ばせたり、人生を確固不動のものたらしめたりするために、時間の束縛を受けること無く、本を読むこと（寝ころがって漫画本を見たり、電車の中で週刊誌を読んだりすることは、勝義の読書には含まれない）（新明解国語辞典）

② 長野県に「読書」という村があります 荒川洋治『世に出ないことば』みすず書房

◇ある歴史小説を読んでいて、信州に「読書」という集落があることを知った。読書？どう読むのだろう。読み書きの巧みな人がいたのか。学校のようなものがあつたのか。ひよっとしたら「どくしょ」と読むのかも。興味がふくらんだ。

③ 「読書村」、「読書小学校」への思いが募る

- ・ 読書村の誕生（1874年） 与川（よがわ）・三留野（みどの）・柿其（かきぞれ）
- ・ 読書村の合併（1961年） 隣接の2村と南木曾町（なぎそまち）へ
- ・ 読書小学校（1873年三留野小学校として創立、1947年南木曾町立読書小学校に改称、2007年、南木曾町立南木曾小学校に統合）

(3) 1965年、それは日本人がキツネにだまされなくなった年です

① 日本人は古来から、「キツネからの働きかけに応じる能力」をそなえていた
内山節『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』（講談社新書）

◇ 1965年を境にして、キツネにだまされなくなった話は全国のどの地域でも、ほぼ一斉に消えた。

1. 高度経済成長期の人間の変化（ものごとを「経済」という尺度で判断する感覚が生まれてきた）
2. 科学の時代における人間の変化（科学的に説明のつかないことは「迷信・まやかし」として否定する精神風土がつくられてきた）
3. 情報、コミュニケーションの変化（電話・テレビ・週刊誌などの普及で「全国一律」に情報が届くようになった）
4. 進学率の高まり（「正解」があるような教育が求められるようになった）
5. 死生観の変化（「自然に帰る」という死生観が薄れていった）
6. 自然観の変化（ゆたかな自然は何かを生産する場としてとらえられるようになった）
7. 老ギツネが暮らせなくなるような森の変化（日本の森の4割が人工林に変わっていった）

② 私たちの人生の中にも「1965年」という時があります

◇こどもは生まれたときから。「キツネから送られるメッセージに応える資質」を兼ね備えている

◇絵本・童話・国語の教科書（ごんきつね／手ぶくろを買いに／きつねの窓／雪わたり／花いっぱいになあれ等）

◇キツネが「星の王子」に教えてくれたこと（『星の王子さま』）

【いま、こうして目の前に見ているのは、人間の外がわだけだ、一ばんたいせつなものは、

目に見えないのだ……。目では、何も見えないよ。心でさがさないとね……。たいせつなことはね、目には見えないんだよ。]

◇中学・高校・大学へと進学していくにつれて、その資質はこころの奥に眠らされるようになる。人生にとっては、さまざまな知識を一つひとつ覚え込むことのほうが重要だと教えられ、自らもそのように認識して生きていくようになる。

◆図書館の児童書コーナーには、幼な子に童話や絵本を表情ゆたかに読み聞かせる母親の姿が見受けられる。母親は子どもをもつと、「子どもときの自分」に戻って、「キツネから送られるメッセージに応える資質」をよみがえらせる。